

[B年] 聖霊降臨節第18主日(2026年9月20日)**【旧約聖書日課】 出エジプト記 12章21～27節**

²¹モーセは、イスラエルの長老をすべて呼び寄せ、彼らに命じた。「さあ、家族ごとに羊を取り、過越の犠牲を屠りなさい。²²そして、一束のヒソブを取り、鉢の中の血に浸し、鴨居と入り口の二本の柱に鉢の中の血を塗りなさい。翌朝までだれも家の入り口から出てはならない。²³主がエジプト人を撃つために巡るとき、鴨居と二本の柱に塗られた血を御覧になって、その入り口を過ぎ越される。滅ぼす者が家に入って、あなたたちを撃つことがないためである。²⁴あなたたちはこのことを、あなたと子孫のための定めとして、永遠に守らねばならない。²⁵また、主が約束されたとおりあなたたちに与えられる土地に入ったとき、この儀式を守らねばならない。²⁶また、あなたたちの子供が、『この儀式にはどういう意味があるのですか?』と尋ねるときは、²⁷こう答えなさい。『これが主の過越の犠牲である。主がエジプト人を撃たれたとき、エジプトにいたイスラエルの人々の家を過ぎ越し、我々の家を救われたのである』と。」民はひれ伏して礼拝した。

【使徒書日課】 ヘブライ人への手紙 9章23～28節

²³このように、天にあるものの写しは、これらのものによって清められねばならないのですが、天にあるものの自体は、これらよりもまさったいけにえによって、清められねばなりません。²⁴なぜならキリストは、まことのものの写しにすぎない、人間の手で造られた聖所にではなく、天そのものに入り、今やわたしたちのために神の御前に現れてくださったからです。²⁵また、キリストがそうなされたのは、大祭司が年ごとに自分のものでない血を携えて聖所に入るように、度々御自身をお献げになるためではありません。²⁶もしそうだとすれば、天地創造の時から度々苦しまねばならなかったはずで、ところが実際は、世の終わりにただ一度、御自身をいけにえとして献げて罪を取り去るために、現れてくださいました。²⁷また、人間にはただ一度死ぬことと、その後に裁きを受けることが定まっているように、²⁸キリストも、多くの人の罪を負うためにただ一度身を献げられた後、二度目には、罪を負うためではなく、御自分を待望している人たちに、救いをもたらすために現れてくださるのです。

【福音書日課】 マルコによる福音書 14章10～25節

¹⁰十二人の一人イスカリオテのユダは、イエスを引き渡そうとして、祭司長たちのところへ出かけて行った。¹¹彼らはそれを聞いて喜び、金を与える約束をした。そこでユダは、どうすれば折よくイエスを引き渡せるかとねらっていた。

¹²除酵祭の第一日、すなわち過越の小羊を屠る日、弟子たちがイエスに、「過越の食事をなさるのに、どこへ行って用意いたしましょうか?」と言った。¹³そこで、イエスは次のように言って、二人の弟子を使いに出された。「都へ行きなさい。すると、水がめを運んでいる男に出会う。その人について行きなさい。¹⁴その人が入って行く家の主人にはこう言いなさい。『先生が、「弟子たちと一緒に過越の食事をするわたしの部屋はどこか?』と言っています。』¹⁵すると、席が整って用意のできた二階の広間を見せてくれるから、そこにわたしたちのために準備をしておきなさい。」¹⁶弟子たちは出かけて都に行ってみると、イエスが言われたとおりだったので、過越の食事を準備した。¹⁷夕方になると、イエスは十二人と一緒にそこへ行かれた。¹⁸一同が席に着いて食事をしているとき、イエスは言われた。「はっきり言うておくが、あなたがたのうちの一人で、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている。」¹⁹弟子たちは心を痛めて、「まさかわたしのことでは?」と代わる代わる言い始めた。²⁰イエスは言われた。「十二人のうちの一人で、わたしと一緒に鉢に食べ物を浸している者がそれだ。²¹人の子は、聖書に書いてあるとおりに、去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。生まれなかった方が、その者のためによかった。」

²²一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取りなさい。これはわたしの体である。」²³また、杯を取り、感謝の祈りを唱えて、彼らにお渡しになった。彼らは皆その杯から飲んだ。²⁴そして、イエスは言われた。「これは、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。²⁵はっきり言うておく。神の国で新たに飲むその日まで、ぶどうの実から作ったものを飲むことはもう決してあるまい。」

「聖書協会共同訳」（2018 年版）読み比べ

出エジプト記12章21～27節

²¹そこで、モーセはイスラエルの長老たちを皆呼び寄せて言った。「行って、家族ごとに自分たちの羊を選び、過越のいけにえとして屠りなさい。²²そして、ヒソブを一束取り、平鉢に入れた血に浸して、平鉢の血の一部を入口の鴨居と二本の柱に付けなさい。朝まで誰も家の出入り口を出てはならない。²³主は、エジプト人を打つために行き巡るとき、入口の鴨居と二本の柱の上にある血を目にされると、その出入り口を過ぎ越され、減ぼす者があなたがたの家に入って、打つことがないようにされる。²⁴あなたがたは、自分とその子孫のための掟として、このことをとこしえに守らなければならない。²⁵主が語られたとおり、あなたがたに与えられる地に入ったとき、この儀式を守らなければならない。²⁶子どもたちが、『この儀式の意味は何ですか』と尋ねるときは、²⁷こう言いなさい。『それは主の過越のいけにえである。主がエジプトの地で、エジプト人を打たれたとき、イスラエルの人々の家を過ぎ越し、私たちの家を救われた。それで、民はひざまずき、ひれ伏すのである。』」

ヘブライ人への手紙9章23～28節

²³ですから、天にあるものの雛型は、これらのものによって清められねばなりません。天にあるもの自体は、これらより優れたいけにえによって清められねばなりません。

²⁴事実、キリストは、本物の模型にすぎない、人の手で造られた聖所ではなく、天そのものに入り、今や私たちのために神の前に現れてくださったのです。²⁵それも、毎年自分のものでない血を携えて聖所に入る大祭司とは違い、キリストは、ご自身を何度も献げるようなことはありません。²⁶もしそうだとすれば、天地創造の時から、度々苦しまねばならなかったはず。ところが実際は、世の終わりに、ご自身をいけにえとして献げて罪を取り除くために、ただ一度現れてくださいました。²⁷そして、人間には、ただ一度死ぬことと、その後裁きを受けることが定まっているように、²⁸キリストもまた、多くの人の罪を負うためにただ一度身を献げられた後、二度目には、罪を負うためではなく、

救いをもたらすために、ご自分を待ち望んでいる人々に現れてくださるのです。

マルコによる福音書14章10～25節

¹⁰十二人の一人イスカリオテのユダは、イエスを引き渡そうとして、祭司長たちのところへ出かけて行った。¹¹彼らはそれを聞いて喜び、金を与える約束をした。そこでユダは、どうすれば折よくイエスを引き渡せるかと狙っていた。

¹²除酵祭の第一日、すなわち過越の小羊を屠る日、弟子たちがイエスに、「過越の食事をなさるのに、どこへ行って用意いたしましょうか」と言った。¹³そこで、イエスは次のように言って、二人の弟子を使いに出された。「都へ行きなさい。すると、水がめを運んでいる男に出会う。その人に付いて行きなさい。¹⁴そして、その人が入って行く家の主人にこう言いなさい。『先生が、弟子たちと一緒に過越の食事をする宿屋〔別訳→客間〕はどこか』とっています。』¹⁵すると、席のきちんと整った二階の広間を見せてくれるから、そこに私たちのために用意をしなさい。』¹⁶弟子たちは出かけて都に行ってみると、イエスが言われたとおりだったので、過越の食事を準備した。¹⁷夕方になると、イエスは十二人と一緒にそこへ行かれた。¹⁸一同が席に着いて食事をしているとき、イエスは言われた。「よく言うておく。あなたがたのうちの一人で、私と一緒に食事をしている者が、私を裏切るうとしている〔別訳→引き渡そうとしている〕。』¹⁹弟子たちは心を痛めて、「まさか私のことでは」と代わる代わる言い始めた。²⁰イエスは言われた。「十二人のうちの一人で、私と一緒に鉢に食べ物を浸している者だ。²¹人の子は、聖書に書いてあるとおりに去って行く。だが、人の子を裏切る者〔別訳→引き渡す者〕に災いあれ。生まれなかったほうが、その者のためによかった。』」

²²一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福してそれを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取りなさい。これは私の体である。』²³また、杯を取り、感謝を献げて彼らに与えられた。彼らは皆その杯から飲んだ。²⁴そして、イエスは言われた。「これは、多くの人のために流される、私の契約の血である。²⁵よく言うておく。神の国で新たに飲むその日まで、ぶどうの実から作ったものを飲むことはもう決してあるまい。』

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

・9月20日「聖霊降臨節第18主日」の日課主題は「キリストに贖われた共同体」。

・旧約日課は、「出エジプト記」から、「主の過越」の出来事を物語る説話より。使徒書日課は、「ヘブライ人への手紙」から、天上における唯一の贖罪の犠牲としてキリストがささげられたことを説く箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、ユダの裏切りの取引を伝える箇所および「過越の食事」の伝承説話。

旧約日課(出エジプト12章より)

・「出エジプト記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)の区分で「律法(トーラー)」の第二巻。「申命記」までの全四巻で展開する「モーセ物語」の第一部を構成。「モーセ誕生譚」から始まり、「モーセ召命譚」、「ファラオとの交渉と十の災い」、「初子の災いと過越の約束」を経て、エジプトのヘブライ人らを導き出し、荒野の旅を経てシナイ山で授与された「十戒」をはじめとする主の律法の朗読に基づいて「神の民」としての契約に入ったというイスラエルの存立基盤となる物語が展開されている。

・日課箇所は、「初子の災いと過越しの約束」の中の一場面。「十の災い」の最後に告げられた「初子の災い」の到来を前に、主がモーセとアロンに対して災いを過ぎ越させる「過越」の儀式を告げてくださり、これをモーセがイスラエルの長老らに告げて聞かせたことを描く箇所。ただし、前段2〜20節で主がモーセらに告げた内容のすべてが繰り返されているわけではなく、要点のみが簡潔に告げられるものとなっている。また、主の指示(2〜20節)を実践するにあたって必要な助言的指示も付加されている。

・この「過越」の「定め」は、エジプトを出るに際して「初子の災い」を避けるための一回限りの緊急避難措置としてではなく、そのことを記念して子々孫々守り続けるべき「儀式」として告げられており、「儀式」そのものがこれを子々孫々受け継ぐべきものとする「定め」を包含する様式を整えている。このようなことから、これが一定の祭儀を継承することを可能にする組織化された集団(祭儀共同体)によって定式化された儀式であると考えられる。

・24節「定め」と訳されるヘブライ語「ホーケ」またはその派生語「フーケー」は、「出エジプト記」中で「定め」または「掟」の訳語で見られるが、その用例は12〜15章(8例)と27〜30章(5例)に集中している(例外は18章の2例)。また、12章の2例(14節、17節)と27〜30章の5例では「不変の定め」という表現が用いられている。27〜30章は、「幕屋」の祭儀や祭司に関する規定が展開する箇所であり、一連の「定め／掟」が、祭司集団によって定式化された伝承であることを示唆する。ただし、「過越」の儀式的食事は、最終的な神殿喪失(後70年)以前に家族単位の儀式として定着していたことが知られている。

・「主の過越」は、エジプトの「イスラエル」に対して主が一方的に定めた災い回避のための儀式であり、その儀式的営みを行うことのほかは何も「イスラエル」に課された義務はない。また、この儀式の「定め」として告げられた主の言説の中に、「イスラエル」の「罪」に関する事柄は含まれず、「過越の犠牲(の小羊)」には、「イスラエルの罪」の償いという意味合いは無い。さらに、この定めは、主が一方的に決められたものであり、定めを守る者が災いを逃れられることを約束するものであるが、ここに相互性が不可欠な契約的関係が結ばれることを示唆する手順は含まれていない。つまり、この儀式の定めによって示される神学的意義は、イスラエルが主の一方的な恵みによって災いを逃れられるように選ばれた、ということに尽きる。

使徒書日課(ヘブライ9章より)

・「ヘブライ人への手紙」は、新約正典中で「パウロ書簡集」に続く位置で扱われてきた書簡文書。後に続く「公同書簡集」と呼ばれる書簡文書(ヤコブ、ペトロヨハネ、ユダの書簡)と並べて「公同書簡」と呼ぶ者もあるが一般的ではない。これが書簡文書であることは、本書末尾にある書簡に特徴的な結語挨拶によって明白であるが、書簡冒頭にあるべき挨拶等を欠いており、差出人や宛名などの情報が完全に欠落している。それが意図的に為されたことなのか、事故により欠落してきたことなのかはわからないが、少なくとも、古代教会で伝承されるに際して冒頭挨拶が復元されることはなかった。東方正教会では、伝統的に本書簡を「パウロ書簡集」の中に含めて扱ってきたが、西方教会では早い段階から否定されてきた。

・本書が著者不明にもかかわらず新約正典に含まれてきたのは、本書の展開する聖書神学的思想の独自性が正統教会の正統教理形成に不可欠なものとされてきたからだと言える。広く四福音書やパウロ書簡は、主イエスの十字架死の出来事を、おもに旧約「出エジプト記」の「初子の災いと過越の出来事」に基づいて神学的に位置づけている。しかし、本書は、それを、旧約律法中の「贖罪日」規定(レビ記16章など)に基づいて位置づける試みをしている。「燭崎日」規定は、大祭司による「民の罪」の赦しを求めるとりなしと贖罪の犠牲奉献が骨格となる。本書は、主イエス・キリストを「真の大祭司」かつ「真の犠牲(の羊)」と解釈し、キリストが「天上の幕屋」で「贖罪日」の祭儀を最終的に完成させられたので、地上の「幕屋」で地上の大祭司によって為されてきた「贖罪日」の祭儀は不要になった、と主張している。「大祭司キリスト」論は、ここに基盤を持ち、また、これを補強するものとして「ヨハネ福音書」17章の「祈り」が「大祭司イエスの祈り」と位置づけられてきた。これが、キリスト教会の正統教理における贖罪信仰を基礎づけている。

・日課箇所は、上述の神学的主張をするために旧約律法を典拠に説明を重ねてきた末に辿り着いた結論が述べられている。

福音書日課(マルコ 14 章より)

・日課箇所は、「受難物語」の中でユダが祭司長らと取引したことを伝える説話箇所、および、主イエスと弟子たちが最後の晩餐として臨んだ「過越の食事」に際してなされた一部始終を描く説話箇所から成る。前後一連の出来事の展開を含めて、「共観福音書」(マタイ、マルコ、ルカ)が共通に伝えている。

・日課箇所は、異なる日付の場面を含む。すなわち、10～11 節は「過越祭と除酵祭の二日前」(14:1)の枠組みの中で展開されている場面であるが、12 節以下は「除酵祭に第一日」の枠組みの中で展開される場面である。「受難物語」は、この日付設定に基づく場面分けを明確な意図に基づいて為していると考えられ、聖書日課の定める日課箇所は、両日を跨ぐ出来事の大きな展開の中で聖書の物語るところを解釈するように求めているのであろう。

・そのような視座で日課箇所を解するならば、「過越の食事」を「主の晩餐」へと再定義されることで暗示される「過越しの小羊としての主イエス」を、「過越しの小羊」として屠るための準備に着手したのが、祭司長らと取引をしたユダであった、ということになる。

・ユダの行為は、しばしば「裏切り」と解され、福音書でも「裏切ろうとしている」(18 節)者と呼ばれ、主イエスの言葉で「人の子を裏切るその者は不幸だ」(21 節)と批判されているように解されてきたが、「裏切り」と訳されるギリシア語「パラディドーミ」は、「引き渡す」(10 節、11 節ほか)とも訳される語であり、「人の子は、人々の手に引き渡され…」(9:31)と繰り返し述べられる事柄と一致している。つまり、ユダが主イエスを「売った」ことは、その意図よりも行為そのものに焦点が向けられて伝えられており、ユダを一連の「十字架死」を実現するための役割を担った者として位置づけていると解される。なお、「パラディドーミ」は、「受け渡す／受け継ぐ」とも訳される語で、「パウロ書簡」では、「主から受けたもの」(Ⅰコリ 11:23)ということを用い表すために多用されている。

・22～25 節は、「主の晩餐」の制定場面として位置づけられてきた。「主の晩餐」は、四福音書以外でも、パウロ書簡が「主から受けたもの」として伝え、教会共同体で継承されるべき重要な儀式として位置づけている(Ⅰコリ 11:23 以下)。

・「主の晩餐」は、「過越の食事」の再定義が為された場面として展開している。しかし、元来の「出エジプト記」12 章で「定め」として規定される「主の過越」には、「主の晩餐」中に示されるような「契約」的要素は含まれない。24 節で「杯」の意味として示される「契約の血」は、同じ「出エジプト記」の別の場面である「シナイ契約締結式」でのモーセの告知の言葉、「見よ、これは主がこれらの言葉に基づいてあなたたちと結ばれた契約の血である」(出 24:8)を示唆している。「受難物語」は、主イエスの十字架死を、「主の過越」から「シナイ契約」に至る全体で意味づけようとしている。

来週の誕生日 (9 月 20 日～26 日)**主日礼拝の讃美歌から**

・21-14「たたえよ、王なるわれらの神を」は、19 世紀以来イギリスの代表的な讃美歌の一つ。作詞のライトは英国教会司祭で 21-218 番「日暮れてやみはせまり」(Ⅰ 39 番「日くれて四方はくらし」)も作詞。作曲のゴスは英セント・ポール大聖堂のオルガニストや王立音楽学校の教授を務めた教会音楽家。

・21-549「わたしたちを造られた神よ」は、金城教会信徒の棚橋峯子の作で、公募により採用。『讃美歌 21』ではこの歌詞に二つの曲を付しているが、549 番は、阿佐ヶ谷東教会信徒・岸一隆がキリスト教音楽講習会讃美歌創作クラスで作曲したもの。

・21-394「信仰うけつぎ」は、19 世紀英国で国教徒からカトリックに転じたフェイバーの作詞。かつては英米圏で広く採用。曲は、19 世紀ドイツ系英国カトリック信徒の教会音楽家ヘミーが、当時のカトリック復興運動の中で作曲。

21-14「たたえよ、王なるわれらの神を」***Praise, My Soul, the King of Heaven***

1. Praise, my soul, the King of heaven, / to the throne thy tribute bring; / ransomed, healed, restored, forgiven, / evermore God's praises sing. / Alleluia! Alleluia! / Praise the everlasting King.
2. Praise the Lord for grace and favor / to all people in distress; / praise God, still the same as ever, / slow to chide, and swift to bless. / Alleluia! Alleluia! / Glorious now God's faithfulness.
3. Fatherlike, God tends and spares us; / well our feeble frame God knows; / motherlike, God gently bears us, / rescues us from all our foes. / Alleluia! Alleluia! / Widely yet God's mercy flows.
4. Angels in the heights, adoring, / you behold God face to face; / saints triumphant, now adoring, / gathered in from every race. / Alleluia! Alleluia! / Praise with us the God of grace.

21-394「信仰うけつぎ」***Faith of Our Fathers!***

1. Faith of our fathers, living still / in spite of dungeon, fire, and sword. / Oh, how our hearts beat high with joy / whene'er we hear that glorious word.

Refrain: Faith of our fathers, holy faith, / we will be true to thee till death.

2. The martyrs, chained in prisons dark, / were still in heart and conscience free; / and blest would be their children's fate / if they, like them, should die for thee.
3. Faith of our fathers! We will love / both friend and foe in all our strife; / proclaim thee too, as love knows how, / by saving word and faithful life.